

発刊によせて

本年度は一昨年から引き続きコロナ禍の影響を受けながらも、果敢に新しい取り組みに挑戦し、確かな結果を残すことが出来たように思う。コロナ禍は現在まで、世界中に多大な影響を与えている。そうした先の見えない危機の時代こそ、確かな哲学、思想が求められるのではないだろうか。当研究所は現代における諸問題の解決に寄与するという自らの使命を再確認し、二〇二三年の本学創立一二〇周年を目指して、更なる飛躍を目指して参りたい。

昨年、当研究所に創価大学の創立者で、仏教思想家の池田大作先生を研究対象とする池田大作思想研究部門が新たに発足した。新部門の設立により、当研究所は現代儒学研究部門、現代仏教研究部門、西洋哲学研究部門、イスラム研究部門と合わせて五研究部門体制として新出発することとなった。九月には中国山東大学池田大作研究所主催による国際シンポジウム（テーマ「池田大作と文明間の相互参考―人類運命共同体の下での東アジアの知恵」）にも参画し、本紀要にも関連論文が掲載されている。今後も池田大作思想研究部門を中心に、池田思想の更なる探求を目指す所存である。

加えて、中国山東大学、韓国成均館大学校、本学の三校共催により、十一月に第九回日中韓国際学術シンポジウムをオンラインと対面の併用で開催した。本年度は韓国成均館大学校が主催校となり、「ポストコロナ時代の東アジア共生と東洋思想の未来」をテーマに、闊達な議論が行われた。制約も多いコロナ禍にあって、国際シンポジウムを年度内に二度開催出来たことは、今後の研究活動にとっても非常に意義のある出来事であったように思う。

最後に、本年度において最も注力した取り組みは、部門単位の研究活動を集大成し、教育に還元することを目的に開催した部門間対話企画「人間力をめぐる対話」である。第一回、第二回は既に昨年度開催され、その内容は地元誌に連載されたと共に、小冊子として全学共通授業「人間力の育成」における授業内テキストとしても活用されている。本年度は最終回となる第三回を九月に開催し、十二月には全三回の内容をまとめた書籍『四大思想から読み解く 人間力をめぐる対話』を発刊することが出来た。この書籍は本学における「人間力の教科書」として末永く教育活動に活用されることが想定され、建学の精神を万年に留める本学の歴史に残る出版であった。

新部門の発足、国際シンポジウムの開催、書籍の発刊など、本年度は多分野において確かな結果を残すことが出来た。その意味で、本年度は本学創立一二〇周年の佳節に向けて、研究所として飛躍の足掛かりを築く重要な一年であった。仏典に「根ふかければ枝しげし、源遠ければ流れながし」という言葉がある。しっかりと大地に根を張り、源が豊かであればこそ、万代の発展があるのではないだろうか。今後も地道な努力を忘れず、新たな挑戦を続けて参りたい。

令和四年二月

東日本国際大学
東洋思想研究所長

松 岡 幹 夫